

平成の石垣修理

このような経緯をもつ本丸東側の石垣ですが、昭和58年(1983)5月の日本海中部地震を契機として翌59年、石垣を定期的に測量する「定点観測」に着手しています。この観測は、平成14年度まで継続されました。また、平成12年度と15年度には石垣概要診断調査を実施し、その結果、膨らみが明確となり、このまま変位が進行すると地震等の衝撃により、石垣が崩壊する危険性があるとの報告を受けました。この報告を受けて、市は文化庁等との協議を重ね「石垣修復計画」を策定、それを基に平成19年度からは、国の補助を受けて地質調査・変位測量・3次元測量・地下水位観測といった石垣の基礎調査に着手しています。

平成20年度には、石垣の調査方法・修理方針等について指導を得るため、歴史・石垣・耐震等各分野の専門家で構成された「弘前城跡本丸石垣修理委員会」を組織し、基礎調査で得られた様々なデータをもとに修理の方向性について検討を重ねてきました。その結果、平成23年8月に石垣を解体修理する方針が決定し、さらに翌24年度には、修理範囲が確定しています。

◆修理範囲(東側)

約100m
◆修理範囲(南側)

約10m

具体的な修理範囲は、東側石垣南端(天守台)から北へ約100m、天守台石垣南側約10mの部分です。

石垣修理のスケジュール

※発掘調査の結果や文化庁との協議等により、変更になる場合があります。

[平成25年～平成26年]

◆本丸の発掘調査

平成25年7月～12月、天守の北側700mの本発掘調査に着手しました。その結果、元禄期に石垣をつくった際のものと思われる盛土を確認しています。平成26年6月より、同じ範囲における発掘調査を再開しており、11月まで継続する予定です。

◆平成26年11月 内濠埋め立て工事着手

天守を曳屋して本丸内部へ移動するのに備え、内濠の埋め立てを開始します。天守への入館は、例年通り11月23日まで可能です。

[平成27年度]

◆4月1日～5月上旬 弘前城天守公開

平成27年弘前さくらまつりまでは、天守を現在の位置で見ることができます。天守内部の見学も可能です。

◆5月中旬～7月 弘前城天守閉館・天守曳屋の準備工事

さくらまつり終了後、天守を閉鎖して曳屋工事用の足場やレールを設置します。本丸へは、引き続き入場が可能です。

◆8月～10月 天守曳屋工事

天守を約70m、本丸の内側へ移動させます。本丸に、工事見学用のデッキを設置する予定です。曳屋工事終了後、天守台(天守の真下)の発掘調査を実施します。

[平成28年度]

弘前城天守を移設先で公開します。

◆石垣修理工事着手

はじめに修理範囲全体の石垣を解体し、積み直しは2工区に分け、南側の天守台付近から行う予定です。天守台の石垣が完成次第、天守を曳き戻すとともに残りの石垣の積み直しを行います。



発掘調査作業風景(平成25年)

ひろさき応援寄付金(ふるさと納税)

[特別コース]

弘前城天守が動く! 世紀の大修理～石垣普請応援コース～

詳しくはこちら↓

<http://www.city.hirosaki.aomori.jp/gyosei/seido/furusato/index.html>



【お問い合わせ先】

青森県弘前市都市環境部公園緑地課 メールアドレス:kouen@city.hirosaki.lg.jp

〒036-8356 弘前市大字下白銀町1(弘前公園 緑の相談所内) TEL:0172-33-8739 FAX:0172-33-8799



史跡津軽氏城跡弘前城跡

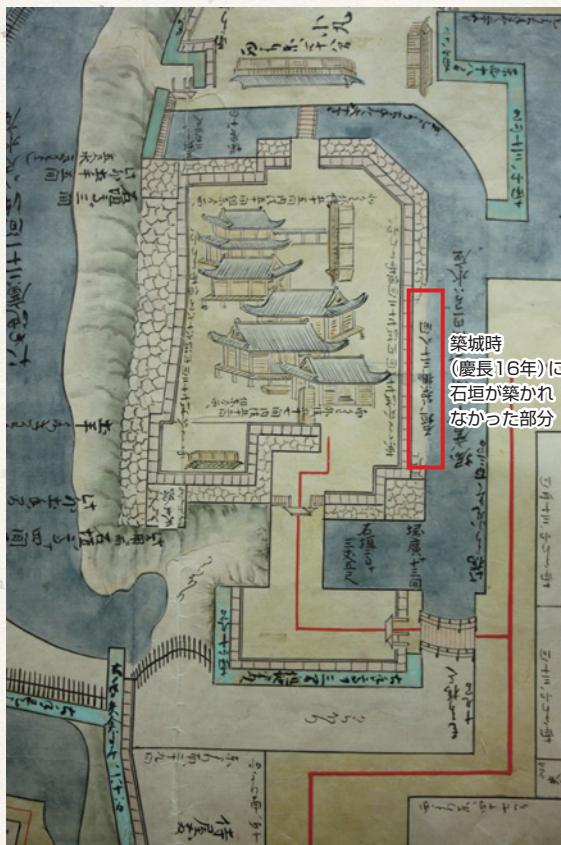
弘前城本丸石垣修理

げじょうばし
下乗橋から弘前城本丸の方向を眺めると、天守の下から北側に長く続く
石垣が目になります。この本丸東側の石垣には膨らみが確認されており、
崩落の危険性があることから、修理工事に入るべく、準備を進めている
ところです。

ためのぶ
弘前城は、弘前藩初代藩主・津軽為信により築城が計画され、2代信枚の時代、慶長16年(1611)に完成しました。本丸・北の郭・二の丸・三の丸・四の丸・西の郭の6郭で構成された平山城で、規模は東西約500m、南北約1,000m、総面積約50haに及びます。濠は三方・三重に巡らされ、西側は蓮池と、元は岩木川の流路であった西濠に守られています。

築城当初の天守は五層であり、本丸南西隅に位置していましたが、寛永4年(1627)の落雷により焼失したと伝わっています。現在の天守は文化8年(1811)、9代寧親が櫓造営の名目で再建したもので、本丸南東隅に位置しています。日本に現存する12の天守のひとつに数えられており、5棟の城門・3棟の二の丸隅櫓とともに重要文化財に指定されています。

弘前城本丸東側の石垣



津軽弘前城の絵図(17世紀半ば 弘前市立博物館蔵)



弘前城では、本丸の周囲にのみ石垣が積まれています。慶長16年(1611)築城時、本丸の石垣には部分的に築かれていない場所がありました。江戸時代の絵図には、本丸東側に石垣の積まれていない部分が描かれています。

この部分の石垣築造が始まるのは、築城から約80年後のことです。弘前藩は4代信政の時代となっていました。信政は新田開発・産業と文化の振興などに尽力した名君として知られ、西濠の土木工事や城内への松の植栽など、弘前城内の整備にも力を入れています。

元禄7年(1694)5月、藩は石垣築造について幕府から許可を得て、7月に起工式である「御鍛初」を行っています。同年9月より本丸南西隅にある未申櫓台から工事を始め、翌8年(1695)6月には本丸東側石垣の工事が本格化しますが、この年、弘前藩は冷害による凶作から、一説には領内人口の3分の1が命を落とすほどの大飢饉となり、8月には工事を中断しています。

飢饉の影響も残る元禄12年(1699)3月に弘前藩は本丸東側石垣工事を再開し、5月に石垣が完成しました。本丸東側の石垣は、飢饉という局限状態を経験した弘前藩の人々の記憶とともに積み上げられているのです。

石垣築造を支えた石切丁場

石垣をつくる石材は、どこから運ばれてきたのでしょうか。

石垣のための石材を採取し、選び割り、運搬までの作業を行った場所を「石切丁場」といいました。『弘前藩庁日記』には、元禄の本丸東側石垣築造の際、如来瀬(弘前市)から切り出された石を牛車・ソリなどで運んだとの記録があります。如来瀬には、石切職人が石を切り分けるために付けた「矢穴」跡のある石が残されており、石切丁場であったことがはっきりと分かります。



如来瀬石切丁場跡で発見された石材

明治～大正時代の石垣崩落・修理

元禄の石垣築造から約200年が経過した明治時代中頃、天守台下石垣の崩落が起こります。そのまま放置すると天守まで崩落する危険性があったため、明治30年(1897)に弘前市出身の大工棟梁・堀江佐吉が、天守を西側に曳屋しています。その後、天守台の北側に続く石垣も崩落したという記録が残っています。最終的に石垣を現在の形状に修復し終えたのは、大正4年(1915)のことでした。



100年前の天守曳屋